

# オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察： 海外パートナー校の大学院生による学習支援

## Evaluating COIL (Cooperative Online International Learning): A Study of the Support to Student Learning Provided by Graduate Students of an Overseas Partner School

山下美樹

### 1. はじめに

近年、国を超え同じ課題に取り組み共修する、オンライン国際連携学習 (Collaborative Online International Learning) (以下 COIL と呼ぶ) が注目を浴びている。その喫緊の課題に、日本人学生の英語コミュニケーション力ならびに異文化コミュニケーション能力の向上が挙げられている (池田, 2015)。その課題への研究的視点となるのが、Dörnyei & Ushioda (2013) の、学習者の成功体験は語学の学びや学習意欲に大きく影響しているという指摘である。オンライン教育は、スマートフォンさえあればいつでもどこでもつながる利便性がある反面、参加者の学習意欲の低下により学習の継続が困難になると言われている。学びの過程において「成功体験が学習意欲に結びつく」ということであれば、COIL においてもその学びの成功体験の仕組みを作ることができないだろうか、という考えに至った。そこで浮上したのが、Dewey (1938) の「学びは、教員やクラスメイトとの意図的な活動や学術的探求における相互作用から起こる」という示唆から、本学と海外のパートナー校間で実施した COIL において、パートナー校と本学の学生間のどのような相互作用が、本学の学生の成功体験と学習意欲に結びついているのだろうか、という問いである。

本稿では、まず国際的に連携し体験学習をとおして学ぶ COIL について概説する。次に 2019 年の 2 学期に実施した COIL で、本学の 12 名の学部 1 年生が、米国の州立大学大学院教育学科 (以下、パートナー校とする) の 4 名の大学院生と共修する過程で行った振り返りシートの記入内容と、担当教員である著者による本学の学生の参与観察内容をデータとし、本学の学生の学習意欲の向上はどのようなところで見受けられるかについて分析し、最終的に本学の学生がパートナー校の大学院生から受けたどのような支援が、本学の学生の

学習意欲に影響しているかについて考察する。

### 2. オンライン国際連携学習 (COIL) とは

オンライン遠隔教育が 1990 年代に欧米に参入し、COIL は 2006 年にニューヨーク州立大学 (SUNY) で開始され、現在全世界にその広がりを見せている。また SUNY は、2014 年に Global Partnerships Network を立ち上げ、米国と海外の大学機関で積極的に COIL 活動を奨励している。COIL はオンラインツール、例えば、Skype、Facebook、Zoom、SLACK、Line、Whatsapp、PowerPoint、動画作成ツールなどを使用し、国内に居ながら国や時間帯、言語の違いを超えて海外の様々な大学生とつながり、異なる文化的な視点から一つの課題について共修する取り組みである。したがって、学生間の主体的な協働の下、相互の学び合いにおける異文化間理解を重視する。COIL は ICT を積極的に使い海外の大学生との共同学習を行うため、ICT スキルの向上も期待できる。その取り組みは非常に柔軟性に富んでおり学際的であるため、いかなる学問分野においても実施可能である (SUNY COIL Center)。したがって、奉仕を通して学ぶサービス・ラーニング活動をオンラインで実施することも可能である。日本国内では、関西大学、千葉大学、東京大学、東京外国語大学、国際基督教大学、鹿児島大学、琉球大学、大阪市立大学、上智大学、南山大学、などの大学が既に精力的に COIL を展開している。

COIL の学習モデルとしては、SUNY の三段階のモデル (①アイスブレイカー - お互いを知り合うタスク、②比較と分析 - お互いの国や文化を知るためのタスク、③コラボレーション - 協働して何かを作り出すタスク) があり、4 ~ 6 週間を割いて行われることが理想とされている (池田, 2015)。他にも様々な方法が取られており、一学期間に授業の 15 回全てを使い行

う場合から1日限定の実施もある。SUNY COIL Centerでは、少なくとも5週間のモジュールを推奨している。同期や非同期で行う授業形態をとり、共同学習やゲスト講師の講義の視聴、あるいは、動画交換を行う形式もある (SUNY COIL Center)。またCOILは、基本的に国を超えた地域で行われるが、国内の大学同士の連携も見受けられる。大学の役割は、あらゆるものが複雑につながり合うグローバル社会で活躍できる人材を育成することである (Blessenger & Anchan, 2015; Bowen, 1977)。まさに、国を超えて共修を図るCOILは、世界の地域をつなぐ有益な活動となる (Murphy, 2011, p.1)。COILの活動はそれを可能にする持続可能な開発目標 (SDGs) を視野に入れたグローバル人材を育む取り組みであると言える。

### 3. 本学 COIL の目的、期間、流れ

本学のCOILは2019年度2学期に、米国パートナー校の大学院生向けのサービス・ラーニング科目と、本学の学部1年生向けの英語科目の間で実施した。その実施目的は、サービス・ラーニングの共同プロジェクトをとおして、パートナー校の大学院生が、本学の学生の英語コミュニケーション力の向上を支援することである。参加者人数は、4名のアメリカ人大学院生と12名の本学の学生である。その計16名が小グループ (1グループにつき、1名の大学院生と3名の学部生) に分かれ、COILの共同プロジェクトを行った。その実施期間は、2019年度の2学期10月7日から11月25日の約7週間である。本COILのシラバスは、パートナー校の講師と共同で作成した。

本COILは、SUNYの三段階のCOILモデル (池田, 2015) に沿って実施した。「①アイスブレイカー (お互いを知り合うタスク)」では、TVミーティング (Zoomミーティングなど) での対面や、COIL参加者のみがアクセスできるSNS (Facebook) にビデオメッセージを載せ交流を開始した。②「比較と分析 (お互いの国や文化を知るためのタスク)」では、各学生がFacebook上に載せた、その自己紹介とナラティブのビデオメッセージについて、Facebook上でコメントを投稿し合い、文化の違いについて感想を述べあった。③「コラボレーション (協働して何かを作り出すタスク)」では、共同でサービス・ラーニング活動を行なった。その過程でZoomによる合同授業のミーティングを5回行った。Zoomへのアクセスは、学内のWi-Fi設備のある教室を利用し、学生たちは各自のスマートフォンを使用した。

### 3-1. サービス・ラーニングとは

サービス・ラーニングとは、学生が社会貢献活動を行い、「理論と実践」の往還のなかで振り返り (内省) を継続的に行う教育手法である。アクティブラーニングのなかでも高い学習効果が認められている体験学習である。サービス・ラーニングはその活動が真の公益活動となっているか、「理論と実践」の往還のなかで継続的に振り返りを行う。1980年代半ばに米国の大学に波及したサービス・ラーニングは、2000年代に日本国内の教育の現場で採用され始めた (唐木, 2010; 村上, 2016)。その活動先は国内地域から海外までに及ぶ。サービス・ラーニングは、学生、教員、地域団体の三者間で互恵的な連携体制を組み、学生は学術的に学んだ知識を使い、主体的に地域活動に参画し、その体験を振り返る。以上の点で、ボランティアやインターンシップとは異なる (Cress, et al. 2013)。

### 3-2. サービス・ラーニングをCOILに導入した理由と意義

サービス・ラーニングをCOILプロジェクトに導入した理由は、米国のパートナー校から参加する大学院生の受講する授業がサービス・ラーニングの授業であったためである。このようにどの国のどの授業科目と協働するかにより、活動期間やテーマ、そして、活動内容が変わってくる。サービス・ラーニングという教育手法は、国を超えて持続可能な開発目標 (SDGs) を視野に入れたCOL教育活動と親和性が高いため、COILへのサービス・ラーニングの導入は有効的である。

COILは学生間の主体的な協働の基、相互に学び合い文化間のやり取りを通して異文化間理解を促進することを重要としているため、本COILにおいてもサービス・ラーニングの要となる振り返り (内省) が必要不可欠となる。サービス・ラーニングの理念は、社会構成主義の教育者、哲学者である Paulo Freire (1972) の課題提起型教育や、John Dewey (1938) の体験学習理論に基づいているが、COILにおいても異なる文化背景をもつ者同士が協働し異文化理解を深めるためには、その協働体験から得た経験知やものの見方を批判的に振り返る必要がある。以上の理由からも、COILで体験を振り返る作業を重視するサービス・ラーニングを導入する意義が認められる。

### 4. 本学 COIL の実施内容

まず、2019年度1学期に、本学の学生12名にはサービス・ラーニングの理解を深めてもらうことを目的に、

*Learning through Serving* (Cress, et al. 2013, p.9-18) の第1章 “What is service learning?” の英文テキストを12名で分担し和訳してもらった。それから、2学期の10月初旬からパートナー校とCOILを開始した。使用言語は英語である。COILの活動名をKakugo Collaboration (覚悟コラボレーション) と名付けた。Zoomを使う際は、Wi-Fi設備の整った教室を借り本学の学生はそこに集まり各自のスマートフォンを使用し、パートナー校の大学院生とつながった。パートナー校の大学院生は、それぞれが職場や自宅からつながっていた。活動の振り返りにはFacebookを使用し全員で共有した。チームについては、1チームをパートナー校の院生1名と本学の学生3名の計4名で構成し、4チームを作成した。三つの段階の各取り組みは内容は、次のとおりである。

まず、第一段階「アイスブレイカー (お互いを知り合うタスク)」では、各チーム内でチーム名を決定し、参加者全員が各自自己紹介動画を作成し、それをFacebookに掲載した。それに対し全員が自由にそれ

ぞれの動画に対して「イイネ」やコメントを書き込んだ。ここで1回目の振り返りを実施した。

第二段階の「比較と分析 (お互いの国や文化を知るためのタスク)」では、Facebookに掲載された各自の自己紹介に、参加者全員がコメントを送り合った。その後にチームごとにZoomでつながり、グループ活動前に予測できる課題や問題点について話し合い共有した。そして、2回目の振り返りを各自で行い、その内容をFacebookに載せ全員で共有した。

第三段階の「コラボレーション (協働して何かを作り出すタスク)」では、「外国人観光客のための緊急事態への備え」を全体テーマとしたサービス・ラーニング活動を行った。各チームの活動内容は、チーム1「浅草を訪れる観光客のための避難対策」、チーム2「熱中症対策」、チーム3「水害による避難対策」、チーム4「自然災害時の避難対策」である。活動後の最終発表をチームごとにZoomで実施した。この活動前、活動最中、活動後に振り返りをした。実施内容の詳細は次のとおりである。

<p><b>第一段階 アイスブレイカー (お互いを知り合うタスク)</b>                  &lt; 10月8日 &gt;                  ● 4グループがそれぞれのグループ名前を決定。                  ● 参加者全員がビデオ自己紹介を作成しFacebookに掲載。  <b>【振り返り①】</b>                  各自でルーブリック (Thanks—感謝の言葉を交換、Compare/Contrast—文化の比較、New Information—新たに知ったことは何か) を使用し振り返りを実施。*提出期限 10月13日</p>
<p><b>第二段階 比較と分析 (お互いの国や文化を知るためのタスク)</b>                  &lt; 10月15日 &gt;  <b>Zoom ミーティング①</b> グループでサービス・ラーニング活動の事前確認として予測できる課題や問題点を共有。                  ● Facebookに掲載した各自の自己紹介動画を基に、文化比較 (Compare/Contrast) を実施。  <b>【振り返り②】</b>                  各自が Zoom ミーティングでの共有内容と文化比較 (Compare/Contrast) を、PIE ルーブリック (Point—学びの重要ポイント、Illustration—協働体験の説明、Expansion—今後の期待) を使用し振り返りを実施。それらを Facebook に掲載し参加者間全体で共有。*提出期限 10月18日</p>
<p><b>第三段階 コラボレーション (協働して何かを作り出すタスク)</b>                  &lt; 10月22日 &gt;  <b>【振り返り③—活動前】</b>                  各自が (1) 自分と家族のボランティア経験と意識の違いについて、(2) グローバルな観点から考えるボランティアについての2点について振り返り、用紙に記入し提出。                  ● 各グループで「外国人観光客を守る緊急事態への備え」をテーマとしたサービス・ラーニング活動について話し合い、Facebookに掲載。*提出期限 10月25日                  ● 以上の内容に対しグループ間で Facebook にコメントを掲載し共有。*提出期限 10月27日                  &lt; 10月24日 (木) &gt; 米国パートナー校の教授が来日。特別講義「サービス・ラーニングについて」を受け質疑応答と意見交換を実施。</p>
<p>&lt; 10月29日 &gt;  <b>Zoom ミーティング②</b> 「緊急事態への備え」をテーマに、各グループで活動計画を決定。</p>
<p>&lt; 11月5日 &gt;  <b>Zoom ミーティング③</b> 各グループ間で活動内容を相談した後に、Facebook で全体共有。  <b>【振り返り④—活動中】</b>                  サービス・ラーニングの活動過程について、CBL ルーブリック (Challenges—挑戦、Break-Throughs—突破、Learning—学び) を使用し振り返りを実施。*提出期限 11月8日</p>
<p>&lt; 11月12日 &gt;  <b>Zoom ミーティング④</b> 各チームでプロジェクトの相談。</p>



<p>&lt; 11月20日 &gt;  <b>Zoom ミーティング⑤</b> グループ発表 (1グループにつき10分間)                  発表タイトル:                  チーム1. 浅草を訪れる観光客のための避難対策                  チーム2. 熱中症対策                  チーム3. 水害による避難対策                  チーム4. 地震発生時の避難方法</p>
<p>&lt; 11月26日 &gt;  <b>【活動後の振り返り⑤】</b> 最後の振り返りシートに各自記入。</p>

以上のように、振り返りについては授業開始から最後まで5回実施した。経験から学ぶために振り返りは重要である。Paulo Freire (1972) が言及するように、人は経験するだけでは学ぶことはできないが、その経験を分析することで学ぶことができる。つまり振り返りを行うことで多面的に学ぶことができる。特に異文化間理解を深めるうえでは、自分自身の経験知を疑い絶対視しないことが重要である。さもなければ自己の固定観念によりものごとを歪めて理解したり、自分と異なる文化背景をもつ者に対するステレオタイプを強めたりする可能性があるからである。

したがって、振り返りのファシリテーションは慎重に行う必要がある。振り返りの作業を、活動前 (目的や計画の明確化)、活動中 (活動記録や対話を活用した振り返り)、活動後 (活動全体の振り返り) に行うことで、学びをより深めることができる (Jacoby, 2015)。11月26日の各自で行った最終の振り返りシートへの記入後、本学の学生には、ナラティブの交換をしてもらった。まず、椅子を円形に並べ座ってもらい、COILの活動前と後での自己変容について説明するために、200枚の写真 (人、自然、物体、生物の4つの種類がある) の中から、活動前と活動後に変化した自分の知識や経験、心境などを比喩的に表す写真を1枚ずつ選んでもらい、それら2枚の写真をクラス全体に示しながら振り返りの語りをしてもらった。

## 5. 研究対象と分析方法

2019年の2学期に実施したCOILで、本学の英語科目を履修する12名の経済学部1年生 (男性7名 内1名がモンゴルから、1名が韓国からの留学生；女性5名 内1名が台湾からの留学生) が、米国のパートナー校のサービス・ラーニング科目を受講する大学院生4名 (男性2名、女性2名) と共修する過程で行った振り返りシートの記入内容と、担当教員である著者による本学の学生の参与観察内容をデータとし、本学の学生の学習意欲の向上について見えてきたパターンをコード化し分析し、最終的に本学の学生がパートナー校の大学院生から受けたどのような支援が本学の

学生の学習意欲に影響しているのかについて考察する。

## 6. 結果

COIL活動での本学の学生の学習意欲の向上は、次の4つのカテゴリーの体験において見られた。一つ目が英語コミュニケーション体験、二つ目がサービス・ラーニング活動体験、三つ目が、自己紹介動画の作成体験、四つ目にオンラインコミュニケーション体験が挙げられる。

まず、一つ目の英語でのコミュニケーション体験については、本学の学生たちの振り返りシートに、「よくネイティブが使うフレーズを肌で感じた (学生1)」、「自分の意見をはっきりと伝え、相手の意見も尊重し十分に理解することが大切だと思った (学生1)」、「文法に気を配れなかったが一所懸命自力でやりきったことが役立った (学生2)」、「現地の学生と交流し英語力が向上したと感じた (学生3)」、「英語スピーキングに楽しさを感じた (学生3)」などの記述があった。本学の学生たちがZoomでパートナー校の大学院生たちと実際にやり取りをしている様子からも、コミュニケーションが成り立つことへの達成感と高揚感が伝わってきた。以前に英語圏の国で海外在住経験のある日本人学生1が、積極的にリーダーシップを執っていた。一方、英語の語彙力があっても外国人とのコミュニケーションに慣れていない学生たちは尻込みをしていた。しかし、パートナー校の大学院生が、そのような学生にも質問を投げかけ、参加を促していた場面が観察された。

二つ目のサービス・ラーニング活動体験に関しては、グループ活動を行うことで「共同で一つの活動に取り組みやり遂げることの楽しさを知った (学生7)」、「自ら行動し情報を探することで知識がつきやる気が出た (学生5)」、「初めは、なぜ地域ボランティアやイベントに参加するのが理解できなかったが、この活動を通して分かった (学生1)」、「ただのボランティアではなく学問の視点から解決策を練り、国境を越えて活動できるところが素晴らしいと思った。実際に活動す

ることでもいろいろと学ぶことができた(学生4)」、「(浅草は) 天気のよい時にしか観光したことがなく、そこでの災害について考えたことがなかった。調べていくうちに場所ごとに情報提供がされ、観光客向けの防災マップもあることを知った(学生2)」、「日本には外国にない災害がたくさんあり、旅行者で困っている人を助けられるようになりたいと思った(学生3)」、「外国に行って、海外の人々とボランティア活動をしたかった(学生6)」といった積極的な感想の記述があった。これらの感想から体験学習をとおして主体性や自主性、さらなる学習意欲が高まったことが伺われた。また、参与観察からも、パートナー校の大学院生の指示を受け、大学内のパソコンスペースで、パワーポイント資料の作成を精力的に行っている様子や、学生同士がグループ内で役割分担をして活動している様子が伺われた。

三つ目の自己紹介動画の作成については、各自が自分の文化を表す物をテーマに3分間動画を作成し、それをFacebookに掲載し、お互いの動画に対して「イイネ」やコメントを書き込んだ。ここでも、パートナー校の大学院生が手本を見せるような形でFacebookにコメントを書き込み、それに続けて本学の学生もコメントを書き込んだ。本学の学生の自己紹介の動画作成については、文化的な物の説明に自分がこれまで挑戦したこと思い出を結び付けたナラティブを収録してもらった。その結果、「過去の自分の思い出を整理できた」、「自己紹介は自分をふりかえる良い機会となった」という積極的な感想が全員から出された。パートナー校の大学院生4名からは、日系アメリカ人、フィンランド系アメリカ人など、自己のルーツに触れるナラティブがあり、米国の人種や民族についてディスカッションが可能となる材料が提供された。この結果からも、ナラティブ交換をCOILの初期段階に導入することで、学生間の相互理解が深まり、学生間のやり取りが活発になってきたことが確認された。

四つ目のオンラインコミュニケーション体験については、本学の学生たちがZoomで海外とつながり授業をしている場面を参与観察したところ、Zoomによる共同授業という新しい試みに挑戦できたことに達成感を感じていた様子が伺われた。その一例として、学生3が寝坊をしてしまったため、自宅からZoomでパートナー校の大学院生との話し合いに参加することを許可した。そのときの学生3の振り返りに「自分の部屋でリラックスした状態で、しかもわからない英語表現をパソコンで検索しながらコミュニケーションを取ることができてよかった(学生3)」という記述があった。また、自宅からつながることが「できた」という達成

感から、COILへの参加意欲が高まったと語っていた。オンラインの利点は、自宅から直接参加することができることである。本学では、2019年度2学期の時点では、まだオンライン授業が普及していなかったため、自宅から授業に参加することは全くの予想外の出来事であった。しかし、この出来事により、学生によっては教室で全員が集まり学習するよりも参加しやすく、学びのモチベーションも向上したことが明らかになった。

この出来事に加えて、学生たちはオンラインでグローバルに取り組む課題に参画した感想として、「地域の人々の助けになる取り組みに参加したい(学生1)」、「グローバルコミュニティーの一員になりたいと強く感じた(学生2)」、「今回のプロジェクトは本当に貴重な体験であり、今後仕事としてできたらいいと思った(学生2)」という記述があった。これまで対面での授業に積極的でなかった学生3が、Web会議ツールZoomを使いスマートフォンに映る大学院生と積極的に会話をしている姿が印象的であった。本学の学生たちからは、パートナー校の大学院生たちとのやり取りは、おしゃべりをしながらインフォーマルに行われ、通常の教員対学生というフォーマルな授業形態と違うところがよかったという感想の記述もあった。

## 7. 考察

以上の結果から励ましてくれる大学院生の存在があることで、本学の学生の学習意欲が向上、継続していたことが明らかになった。本COILでは、初めからパートナー校の大学院生が本学の学生を支援するといった役割と関係性が設定されていた。その関係性のなかで本学の学生たちは、パートナー校の大学院生のサポートと励ましを受けながら活動することができた。本COILでは、パートナー校の大学院生たちは成人教育学の専攻であったため、本学の学生たちへの対応にも慣れていただようである。そのおかげで本学の学生のほぼ全員の成功体験が実現され、最後までCOIL活動を継続できたと言える。上記の結果から、パートナー校の大学院生との活動で受けた支援として次の3点が顕著であった。一つ目が英語でのコミュニケーションに対する支援、二つ目が情緒的支援、三つ目がサービスマーケティング活動での支援である。

一つ目の英語でのコミュニケーションに対する支援については、本学の学生1は、グループリーダーであるパートナー校の大学院生Sについて「Sさんは(私が)英語が分からないときは、根気強く聞いてくれて、

チャットにも言葉を書き入れてくれた」と、活動実施後の振り返りシートに記述していた。オンライン上では、どちら側の母国語を使用するかで、発話者の力関係や発話量に偏りが出ることが指摘されている(熊谷・加藤, 2014; 岩崎, 2016)。この課題への対策として、参加者間の役割をはじめから決めておくことでその課題が解決できると考えられる。本学の学生1からはさらに、「Sさんは英語でやっていることを忘れるくらい上手にディスカッションを引っ張っていった」という記述があった。Zoom ミーティングでの関与観察でも、大学院生のリーダーたちが学部生たちの発話を促していたことが見受けられた。特にパートナー校の大学院生Sは、元高校の教諭であったため、本学の学生たちを上手にリードしていた。Zoom でサービス・ラーニング活動の打ち合わせをする際は、本学の学生たちのペースに合わせ、内容が伝わっているか確認をしながらわかりやすく進めていた。最終の振り返りでは、本学学部生の12名全員が、英語コミュニケーション力が向上したと感じられたと答えていた。この成果が学生たちのその後のTOEICテストの結果に表れているわけではなかったが、英語で海外の人々とコミュニケーションを取ることに自信がついたことは明らかである。

二つ目の情緒的支援については、本学の学生たちの最後の振り返りシートに、彼らがCOILを開始する前に語学面やコミュニケーションの面で不安に感じていたという記述があった。しかし、パートナー校の大学院生が話しやすく親しみやすい環境を作り、情緒的なサポートもしてくれた。本学の学生5は、グループリーダーであるパートナー校の大学院生Tに対し「Tさんは、職場の話をしてきて自分もそんなグローバルな職場で働きたいと思った。」と振り返りシートに記述している。プロジェクト以外の会話が学生たちの関係性を構築し、プロジェクトを継続する上で重要になっていたことも明らかである。他にも学生6からは、グループリーダーであるパートナー校の大学院生Aが、米国での人気テレビ番組や人々の余暇の過ごし方、生活習慣や家族のことを話してくれてとても楽しかったという記述があった。ナラティブの交換は、情緒システムを起点に認知と行動をコントロールし、感情的交流が基盤となり相互理解と尊重を促す(Gergen & Gergen, 2004)。それにより、英語によるコミュニケーション力ならびに異文化コミュニケーション能力の向上も期待できる。同じく学生6からは、大学院生Aは「私が言葉に詰まって話せなくなったとき、飼い猫を画面の前に置いて和ませてくれた」と記述している。大学院生Aの家族についての語りや、飼い猫を見せた

りするなどの私生活を自己開示するなかで親近感が増したようである。また、COILの第一段階において、自己紹介動画を使いコメントをし合い、それに対する振り返りを行うことで相互理解と相互尊重が高まったと考えられる。

三つ目がサービス・ラーニング活動での支援である。本学の学生1からは、グループリーダーである大学院生Sについて、「Sさんの指示が的確で動きやすかった」との記述があった。また、本学の学生7からは、「(大学院生Tは)調べる内容も支持してくれたので効率的にグループでまとめることができた。自ら動くという達成感を感じ、様々な視点で考えることができた」といった記述や、通常の対面授業ではおとなしくあまり発言しなかった学生3が次のような記述をしていたことから、大学院生Tの支援の成果が表れている。

国内でただ英語の勉強をするのではなく(ネイティブと)英語を話すという活動ができたし、何よりも自分は英語を話す機会がなく、英語で会話ができないという不安があったが、それも無くなり自信がつき英語を話す楽しさを知った。今までは英語を話したいけど全然できないし、もう無理だと思っていたけど勇気をもらえたプロジェクトだった。そして、災害の危険性などの日本の情報を英語で伝えるという実的なこともでき、とても有意義だった(学生3)。

以上のように、パートナー校の大学院生と本学の学生の関係性は、サポートする側とされる側であり、サービス・ラーニング活動の運営を大学院生たちに大きく依存する結果となった。しかし、本学の学生にとってはここまでの支援が必要であった。学部生1年生にとっては何もかもが初めての経験であったため、グループ間でメンターとメンティーの関係性を設定したことや、リーダーからの明確な指示があったことで不安が低減され行動が起こりやすくなったようである。この関係性が本学の学生の学習意欲向上の大きな助けになったと言える。本学の学生に5段階のリッカート尺度を使い、パートナー校の大学院生との心理的距離について調査したところ、12名全員が5の「非常に近く感じる」を選んだ。Dewey (1938) の「学びは教員やクラスメイトとの意図的な活動や学術的探求における相互作用から起こる」という言葉に立ち戻るが、参加者間の相互理解と相互尊重が、成功体験や達成感、学びにつながり、さらなる新しい課題に挑む自信と希望が生まれる要素となる。また、COIL活動での体験はそれが失敗体験であっても、サービス・ラーニング



の要となる振り返り (内省) を継続して行うことで、次への挑戦の大きな糧となると言えよう。

## 8. 今後の課題

本研究では、パートナー校の大学院生からの励ましと次の学習支援、(1) 英語でのコミュニケーションに対する支援、(2) 情緒的支援、(3) サービス・ラーニング活動での支援が、本学の学生の学習意欲を向上させる要素となっていることが明らかになった。今回の COIL では、パートナー校の大学院生が一方向的に本学の学生の支援をする形をとり、その役割と関係性が設定されていたが、この役割を担ったパートナー校の大学院生の体験や感想についてはまだ調査をしていない。支援する側の負担などの経験を、彼らがどのように捉えていたかについて探るため、パートナー校の担当教員にインタビュー調査を行う必要がある。それに加え異文化やグループダイナミクスの観点、そして、オンラインコミュニケーションに欠ける五感からの情報をどのように補完するのかなども含め、オンライン上の共修を発展させる方策を調査・検討する必要がある。今般のパンデミック COVID-19 の影響もあり、授業のオンライン化が進むなか COIL はますます注目を浴びる教育活動となるだろう。COIL をより充実させていくためには、教員が ICT ツールとそれを使用する知識やスキル、その教授法を習得することは論を俟たないが、教職員そして学生共に、これまでの教育手法や経験や先入観に囚われないマインドセットが必要になってくると言えよう。

## 参考文献

- Blessinger, P., & Anchan, J. P. (Eds.). (2015). *Democratizing higher education: International comparative perspectives*. New York, NY: Routledge.
- Bowen, H. R. (1977). *Investment in learning: The individual and social value of American higher education*. Boston, MA: The Johns Hopkins University Press.
- Cress, C. (2013). What is service learning? In C.M. Cress, P.J. Collier, & V.L. Reitenauer (Eds.), *Learning through serving: A student guidebook for service-learning and civic engagement across academic disciplines and cultural communities* (2nd ed.) (pp. 9-18). Stylus Publishing, LLC.
- Dewey, J. (1938). *Experience and education*. New York: Collier Books.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2013). *Teaching and researching: Motivation*. Routledge.
- Freire, P. (1972). *Pedagogy of the oppressed*. London: Penguin.
- Gergen, K. & Gergen, M. (2004). *Social construction: Entering the Dialogue*. Wallingford, PA: Taos Institute Publications.
- Jacoby B. (2015). *Service-Learning Essentials: Questions, Answers, and Lessons Learned*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Murphy, D. (2011). The impact of faculty reflection on international service learning experiences. *Journal for Civic Engagement*, 17, 1-16.
- SUNY COIL Center. <https://online.suny.edu/introtocoil/> (2020年9月22日閲覧)
- 池田佳子 (2015) 「アウトバウンド促進授業実践としての COIL (オンライン国際連携学習)」 *グローバル人材育成教育研究*, 2 (2), 65-70.
- 岩崎浩与司 (2019) 「テレコラボレーションにおける対話環境の構築－ウェブ会議システムを使った日本語対話の実践から－」 *e-Learning 教育研究* 2019年13巻 p. 29-41.
- 唐木清志 (2010) 『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』 東信堂.
- 熊谷由理・加藤鈴子 (2014) 「『第三の空間』としてのテレコラボレーション」『言語文化教育研究』12, 148-166.
- 村上むつ子 (2016) 「第1章 震災大学ボランティア (サービス) 活動—これからの繋がりに見える課題—」『リベラルアーツはく震災・復興とどう向き合うか』 風行社.